

ごあいさつ



2006年、笹川平和財団（SPF）は設立20周年を迎えます。特段、賑々しい記念行事は予定していませんが、世の中が大きく変化してきたなかで、SPFが達成したこと、成し得なかったことなどを総括し、今後のあり方を探る手がかりとするような取り組みを始めたところです。

わずか20年の間に、国際情勢をゆるがすような数々の出来事が起きました。冷戦終結・ソ連邦の消滅をはじめ、湾岸戦争、アジア金融・通貨危機、米国同時多発テロとそれに続いたアフガン戦争・イラク戦争など、枚挙にいとまがありません。なかでも、長い目で見たときに人類史を画するような大きな動きといえば、近代産業文明の担い手としてアジアが台頭してきたことではないでしょうか。日本にはじまり、アジアNIEs（韓国、台湾、香港、シンガポール）やASEANに広がった産業化の動きが中国、インドにまで及んだ結果、数百年ぶりに経済力の中心がアジアに移ってくるような勢いです。

しかし、ビジネスや経済力の面でアジアの存在感が高まってきたというだけでは、人類史を画することにはなりません。すでに一部の識者が提唱している、アジア発の「ルネッサンス」ともいえるような文明論レベルでの動きにつなげていく必要があると思われます。経済発展と繁栄の真っ只中にありながら、閉塞感、不安、脅威に悩んでいる現代物質文明の行き詰まりを打開するような方向で、人々の価値観やライフスタイルなど広範な領域にわたる刷新と創造につながってこそ、はじめてアジアの台頭が人類史的意義をもつことになるはずで

す。西欧が産業革命を主導してからこの方、欧米をモデルとみなし、そこへの到達度によって進歩の程度を測るような「単系的な発展」の見方が優勢でした。すなわち、西洋化することが発展や進歩と同義とみなされたわけです。しかし、経済力をつけてきたアジア各国が、経済以外の分野においても自国の個性や伝統を再発見し、他国文化との交流の中で新たな創造性を発揮すれば、その結果として「人類の多系的発展の可能性」を示すことになるのではないのでしょうか。これまでの日本の国際貢献は、ビジネスや経済分野を中心としたあり方が主流でしたが、今後は手薄だった分野での活動も強化しつつ、率先してアジア・ルネッサンスの先駆けとなることが望まれます。

このような大きな文明史的文脈で、一民間財団にできることは限られているかもしれませんが、内外の同志の協力を得ながら、SPFに果たせる役割を模索していきたいと思

笹川平和財団会長 田淵 節也